

# 沼正三・倉田卓次・天野哲夫——『家畜人ヤプー』騒動解説

河原 梓 水

## はじめに

沼正三著『家畜人ヤプー』は、団鬼六による『花と蛇』と並んで、日本で最も著名なSM小説のひとつである。『花と蛇』と同じく、もともと読者投稿雑誌『奇譚クラブ』に連載されたものだが、『花と蛇』が女性に対する責めを中心に描いた小説であるのに対し、『家畜人ヤプー』は、主に男性に対する制度的暴力を描いた小説である。本作は、一九七〇年に初めて単行本化された際はベストセラーとなり、「戦後最大の奇書」などと呼ばれ、しばしば「究極のマゾヒズム」を描写した作品として言及されてきた。その後も版を重ね、文庫化、完全版の出版、そしてコミカライズもなされるなど、現在でも一定の人気を博し、読み継がれている<sup>①</sup>。それは、この作品がまだ現代的意義を失っていないというこの証左であろう。

しかしながら、本作をいかなる方法で研究対象とするにしても、まず立ちはだかる問題がひとつある。それは、作者・沼正三がいわゆる覆面作家とされ、その正体とされてきた人物が複数いることである。さらに、「家畜人ヤプー」は一九五九年から一九九〇年代まで、長きにわたって修正・加筆されてきた作品であるため、どの部分が誰の手になるものかという点も大きな問題となる。

本稿は、これらの問題のうち、作者の正体に焦点をあて、沼正三の

正体をめぐる議論に終止符を打つことを目的として書かれる。そしてこれを通じて、私見では『家畜人ヤプー』騒動の被害者ともいえるべき作家・天野哲夫を適切に位置づけ、論ずることができる土台を築くことも目的とする。

## 一、問題の所在

「家畜人ヤプー」は、『奇譚クラブ』一九五六年一二月号から連載を開始し、以後中断や『奇譚クラブ』自体の休刊をはさみながら、一九五九年六月号まで計二一回連載された。物語が完結して連載終了したわけではなく途中で休載となり、そのまま連載再開されることなく終わったものである<sup>②</sup>。そのため、後に続編が書かれることとなった。内容は、「核戦争勃発と疫病流行により住めなくなった地球を出走した英国人が築いたとする宇宙帝国イースにおいて、日本人の末裔が家畜・ヤプーとして繁殖させられ、過酷に使い捨てられる未来世界」を描くものであり、「設定の緻密さ、世界観の壮大さは高く評価されたものの、汚物表現を嫌悪する読者も多く」マゾヒストやサディストを讀者に持つ『奇譚クラブ』においても、その賛否はわかれた（河原二〇二三）。しかし一九七〇年に初めて単行本として出版された際には、プロモーター・廉芳夫による巧みな宣伝戦略によって大いに反響を呼

びベストセラーとなった。この宣伝戦略こそが、作者・沼正三を謎めいた匿名作家として打ち出す戦略である。

『ヤプー』への世間の関心は、作者の正体をめぐるミステリーによって、何倍も増幅されてきたといえる。初単行本化の際、沼正三の正体は不明とされ、「匿名作家の衝撃作」という触れ込みで大々的な宣伝が行われた。さらに、沼の代理人としていかにも「あやしげな」マゾヒスト・天野哲夫が立てられメディアに登場したことで、『ヤプー』は週刊誌の格好の題材となった。天野こそが沼だ、あるいは別の著者がいるのだ、といった憶測がなされたが、この状況は基本的に現在も続いているといつてよい。以降、『家畜人ヤプー』は、沼の正体をめぐっていわばスキャンダラスに言及されることで、世間の関心を再生産してきたのである。一九八二年、天野と同様、多数のSM雑誌で活躍していたマゾヒスト作家・森下小太郎が、沼の正体は東京地裁判事・倉田卓次であると暴露したこと、これを受け、代理人・天野哲夫が、自分は代理人ではなく沼正三本人である、と応酬したことで、作者問題は再燃、倉田という第三の人物が加わったことでより一般大衆の興味を喚起することとなる。

作者の正体に過度に注目が集まることは、相対的に、作品そのものに対する議論の停滞を招いている。作者が複数いる可能性があり、さらに複数の版があり、後半部分は一九七〇年代以降断続的に書き継がれたものであるにもかかわらず、その成立過程にこれまで十分な注意が払われることはなかった。そして、十分に内容が吟味されることなく、ほとんどの場合日本人が白人に家畜化されるといふ設定のみを以て、日本人男性による、敗戦・占領のトラウマを描いた作品だとみなされてきた。

もちろん、文学作品をどのように読むのかは自由であり、作者に関

する「ミステリー」をぬきに本作を読むことができないという立場も否定されるべきではないだろう。単行本刊行以後の、『ヤプー』の受容のされ方を考える上では、このミステリーは重要な役割を果たす。

しかし一方で、初出時の時代性を踏まえて作品を位置づけること、沼正三の思想の時期ごとの変遷を追う作業も可能でなくてはいけないだろう。とりわけ、本作が天皇制や人種差別、ナチズムの要素を取り込んでいる作品である以上はなおさらである。さらに、作者と目されてきた天野哲夫は、実名でも旺盛な執筆活動を行った人物であり、彼の実名著作を読む際にも、彼と沼正三との関係は明らかにしておかなければならないだろう。

筆者はかつてこの点を問題視し、「家畜人ヤプー」を『奇譚クラブ』に連載した沼正三は、裁判官・倉田卓次であると断定した上で、一九五六年から一九五九年という「ヤプー」初出時の時代性を踏まえ、作中に表われた戦後のナシヨナリズムの形態を分析した（河原二〇一九）。なぜ倉田と断定したのかといえば、「ヤプー」が連載された時期の『奇譚クラブ』を通読すれば、この時の沼の正体が天野ではなく倉田であるのは明らかといつてよく、作者をめぐるミステリーは、あくまで一九七〇年に作り出された広告戦略と、天野および作者と名指された倉田の虚偽の弁明が独り歩きした結果と考えられるからである。

この時は紙幅の都合もあって、『奇譚クラブ』に「ヤプー」を連載した沼正三が倉田であることは、簡便に指摘したにとどまった。そのため、沼正三＝天野哲夫説や共同筆名説を根絶するに至らないようである。したがって本稿では、まずより詳細に沼―倉田の比定と騒動の詳細を記述し、天野説・共同筆名説を過去のものとすることを目指したい。

## 二、個人情報比較

後に詳しく述べるが、一九八二年、『奇譚クラブ』等のマニア雑誌で長く作家として活動し、沼正三と長らく文通し面識もあるとする森下小太郎が、沼正三の正体は東京地裁判事である倉田卓次である、とする暴露記事を発表した（森下一九八二a）。これを倉田は長く黙殺してきたが、二〇〇五年、かつて『奇譚クラブ』を購読していたこと、その際に沼正三を名乗り森下と文通していたことを事実として認めている（倉田二〇〇五）。森下が所持していた倉田からの手紙には、「ヤブ」の著者でなければ知り得ない情報が含まれているため、倉田が単なる騙りであったとは考えられない。倉田はこの点について、「ヤブ」の作者は真に天野であり、手紙に記したヤブに関する情報は、天野とも文通をする中で彼に提供したアイデアであり、それを天野が小説に盛り込んだのだ、と主張した。そして文通で沼を名乗ったのは虚栄心からである、と述べている。

倉田が、「家畜人ヤブ」の連載前後に、作者本人か、作者と関係のある人間しか知り得ない情報が書かれた手紙を森下に送り、その上で沼は天野だと証言しているということは、「家畜人ヤブ」を執筆した沼正三の正体は、①天野、②倉田、③双方もしくは双方を含む複数人しかありえないことを意味する。したがって、「家畜人ヤブ」を執筆した沼正三の正体は、この三つの仮説を検証すれば事たりるはずである。

ここで、「家畜人ヤブ」を執筆した沼正三の正体」といささか回りくどい書き方をしているのは、後年、「沼正三」の名で発表された著作には、作者が天野哲夫であることが明らかかなものがあるからである。一九九〇年代に刊行された沼名義のいくつかの単行本は、初出時

は天野の名で発表されたものが含まれる<sup>6</sup>。この「沼正三」は天野であると判断するべきであるが、だからといって、沼が最初から、『奇譚クラブ』に登場した時から天野であったとはいえないのである。

したがって、まず本章では、沼の活動の始まりである『奇譚クラブ』活動期間において、沼が誌上で明らかにしている個人情報をまとめ、その上で、倉田及び天野の個人情報と対照させることで、『奇譚クラブ』で活動した沼正三、つまりは「家畜人ヤブ」を構想し執筆した沼が倉田であることを明らかにしたい。

### （一）『奇譚クラブ』における沼正三

沼正三は、それなりに多くの個人情報を『奇譚クラブ』に残している。とりわけ、沼の最初の連載エッセイ「あるマゾヒストの手帖から」（後に「ある夢想家の手帖から」に改題。以下、「手帖」と略称）と、この連載ではカバーしきれない、毎月発表される小説・映画・漫画等々のうち、マゾヒスティックに解釈できる作品をリアルタイムですべて紹介・レビューするために開設された「手帖雑報欄」（速報欄とも）、読者同士のやり取りその他に用いられた「沼正三便り」においては、沼は時おり自身のこと言及している。以下、誌上に表明された沼の個人情報について、当該部分を引用しながら示す。

（A）大正末期の生まれで、学徒出陣した

1. 私は大正末期の生れですから、戦後派と自らいわれる貴方よりは年長にせよ、せいぜい兄貴位のところ、貴方の年代を理解すること貴方の父君の比ではないつもりです。今度の戦争に学徒出陣した時のことを度々書きましたから、まさか私をそんな老人と思う人がいるとは思ってなかったので吃驚し

ました。(沼一九五八、一四四頁)

(B) 外地(南方/常夏の国)で終戦を迎えた。初年兵は満州で過ごした

1. 「私は在外中、捕虜になった時、相手の司令官夫人から訓練を受けて生れもつかぬマゾヒストとして復員してきた」(沼一九五三b、一六頁)

2. 「私の話は終戦の年から始まります。当時私は若い元気の良い兵隊でしたが、南方のある町で、ある魔女の魔法にかけられたのです。(中略)訓練された兵隊として日本を出ました私は、こうして訓練された犬として復員して参つたのです」(沼一九五四a、二二〇、二二二頁)

3. 「私は、初年兵は満州でやったのだが」(沼一九五四c、一一〇頁)

4. 「地名も部隊名も書けないが常夏の国のある中都市<sup>(7)</sup>。英軍に降伏して武装解除され、駐屯自活で復員の日を待っているある部隊の部隊本部で庶務の仕事をしていた」(沼一九五七、六八頁)

(C) 外地で復員を待つ間、沼と同じく「学歴が大学」であった仲間が射殺された。部隊長と相談し、彼の死因は病死ということにした

1. 学歴が大学というのは兵隊中で兵長の私と上等兵のKだけなので(中略)Kが射殺された。誰が何で殺したのか、何も知らせられない。唯引取に來い、というのだ。(中略)復員を待たずに横死したKが可哀そうだった(部隊記録ではK上等兵は戦病死となっている筈である。Kの遺族の人にも真相は知らせないことに当時部隊本部で決めたのだ)(沼一九五七 六八―六九頁)

(D) 復員後東京の大学に復学した

1. 「大学時代、私は東京中野のある素人下宿に下宿していました」(沼一九五三a、一三三頁)

2. 「復員後の大学生活中も」(沼一九五三b、一六頁)

3. 「終戦後一、二年の東京の電車の朝夕の混雑ときたら経験した人でなければ想像もつくまい。(中略)昭和二十一年の暮の話である。私は東横線田園調布のある家で一夜を送り、翌朝ラツシユ時田園調布駅始発の渋谷行に乗つて」(沼一九五三d、七〇頁)

(E) 一九五〇年頃に結婚

1. 「三年前に今の家内と結婚した。勿論私はマゾヒストとしての理想の夫婦生活を作るべく努力して来た。ところが結婚と同時に公務員アパートに入ったが」(沼一九五三b、一六頁)<sup>(8)</sup>

(F) 職業は公務員。工学技術とは無関係の職

1. (E) 1<sup>(9)</sup>
2. 「私は工学技術とは無関係の職業についていますので、ヤブーについての御高見をもっと詳しく伺えれば幸甚です」(沼一九七六 三三六頁)

(G) 祖父は某伯爵家のお抱え車夫をしていた

1. 「私の祖父が明治二十年代に後の某伯爵家のお抱え車夫をしていた当時のことである」(沼一九五三c、七五頁)
2. 「私の祖父が政府高官M——後の伯爵——家の御抱え車夫だった頃、(中略)祖父は藤堂藩の下人の息子だったのだが(中略)古い紳士録で調べると、M婦人の夫君は有名な県令で、明治二十年には子爵になっていた人である」(沼一九五四d、一五二、一五五頁)

(H) 一九六二年頃、外国に滞在していた

1. 長らく本誌上でも顔を見せられなかった沼正三氏から、久方ぶりに、本当に久方ぶりにお便りがありました。御住所は或る外国（明記はしてありましたが、お許しがありませんので特に秘匿しておきます）です。相当以前から滞在しておられたらしく書かれてあります。（箕田一九六二、一九一頁）<sup>10</sup>

本項目は沼自身が記したものではないが、十分に信頼がおける証言であるため取り上げた。

以上である。これらの情報は、もちろん虚偽である可能性を含む。一九五〇年代、サディストやマゾヒストは精神異常者が潜在犯罪者とみなされていたため、多くの投稿者は実名特定を強く恐れていた。沼もまた、特定を防ぐため、いくつかのフェイクを入れていたと考えるのが自然である。これを前提として、沼の個人情報倉田および天野の経歴と比較してみたい。

### (二) 倉田卓次の経歴

倉田の経歴は、彼が実名で著した『裁判官の戦後史』・『裁判官の書齋』等の著作および『判例タイムズ』六二巻一二号（二〇一）に掲載された倉田の年譜を参考にした。生年や職業・軍歴・学歴等は現在広く公開されていること、出典が多岐にわたることもあり省略した。

(A) 一致：大正一一（一九二二）年一月二〇日生まれ。

(B) ほぼ一致：学徒出陣し、外地（台湾）で武装解除され、終戦を迎えた。ただし、初年兵は満州ではなく津田沼（倉田一九八七）。

(C) 一致：台湾で復員を待つ間、「初年兵内務班以来の親友長与君

——東大総長の息子」を「台北陸軍病院で喪」う（倉田一九八七、二四頁）<sup>11</sup>。

(D) 一致：復員後、東京大学に復学した（一九四六年復員。東京大学法学部法律学科）。

(E) ほぼ一致：一九四九年一月に結婚（倉田一九八七、七七頁）。

(F) 一致：職業は公務員（東京家地裁判事補（一九五一年四月～一九五五年六月）、長野家地裁判事補（一九五五年六月～一九五九年四月）、最高裁（民事）調査官（一九五九年五月～））。

(G) 未調査

(H) 一致：国連技術援助研究員制度にてドイツに留学。一九六二年五月七日に日本を立ち、約一年間留学している（倉田一九九三、一八七頁）。

以上のように、未調査の（G）を除き、倉田の経歴は、沼が誌上に示した個人情報とほぼ完全に一致する。より詳細にみていけば、沼は初年兵を満州でやったと述べているが倉田は津田沼であるといった相違はある。「K」は大卒とは書かれていても親友だったとは書かれていない。沼が述べる英軍に武装解除されたという点も事実かどうか不明である。しかしこのような相違は、個人特定を防ぐためのフェイクとみなせるだろう。逆に言えば、このような枝葉末節を除き、沼はかなり正直に自らの情報を記しているともいえる。

### (三) 天野哲夫の経歴

次に、天野の経歴との比較を行う。『あまとりあ』、『奇譚クラブ』、『裏窓』ほか、『S&Mスナイパー』に一九八九年から天野が連載した「ある夢想家の体当たり随想録」、単行本プロフィール等を参考にし

た。生年や職業・軍歴・学歴等は倉田と同様出典を省略した。

- (A) 一致…大正一五(一九二六)年三月一九日生まれ。  
 (B) 不一致…大卒ではない。戦前は満州の特殊鋼鉄株式会社で働き、終戦末期に帰国し海軍に入隊、佐世保で終戦を迎えた。復員後は博多に戻る(天野 一九八九、二四四頁)。  
 (C) ×(比較不能)。  
 (D) 不一致…(B)を参照。  
 (E) 不一致…一九五〇年代末～六〇年頃に結婚(天野 一九八八、二四七頁)。  
 (F) 不一致…戦後は博多に戻っていたが、家族がいとんでいたヤミ商売で失敗し東京に引っ越す。結核を発症し、東京都練馬区の療養所(藤見丘静風荘)に入所。一九六七年新潮社に就職。  
 (G) 不一致…「佐賀県の田舎の可成り裕福な家」(KS 一九五四、四〇頁)  
 (H) 不一致…一九六二年、天野は国内のマニア雑誌で連載を持っており、記事も滞ることなく掲載されている。<sup>②</sup>

天野は繰り返し自身の半生をエッセイに書いているが、その内容には細かい異同がある。それは例えば、出身地については「生まれも育ちも筑前・博多」とある場合、「佐賀県から六歳の時に博多に転居」とある場合などである。しかし、基本的に福岡県周辺と述べており、それ以外とするものは管見の限りない。結核療養所の入所期間も、三年と書いてあるもの、五年と書いてあるものなどがある。しかし、療養所に入所していない、とするものは管見の限りない。東京の大学に通ったという記述もない。このように、天野の事績を正確に確定する

ためにはより詳細な調査が必要であるが、本稿では、天野が公開しているプロフィールが沼とは似てもつかないことが確認できれば十分であると判断し、これ以上の調査は行わなかった。

以上の比較をまとめると、沼正三のプロフィールは、倉田の経歴とほとんどすべて一致し、逆に天野の経歴とは(A)を除いて全く一致しないことがわかる。とりわけ(H)の海外滞在歴は当時それほど一般的ではないため、この経歴が時期を含めて完全に一致する事実は重い。『奇譚クラブ』編集部の報告は、『ヤプー』が世間をにぎわせるはるか以前のことであり、虚偽の可能性は低い。森下小太郎もまた、ドイツ・ハンブルクから沼の手紙が届いたことを『諸君!』記事で記している。ドイツはまさに倉田の留学先であり、さらにハンブルクは倉田の滞在先のひとつと一致する。この時期に天野が日本にいたことは明らかであるため、沼正三を名乗りドイツから両者に手紙を送った人物は倉田であると判断してよいだろう。

倉田が当時沼を名乗っていた以上、この段階で『奇譚クラブ』時代の沼を倉田だと断定してもよいほどであるが、これのみでは、沼正三＝天野・倉田(+a)という共同筆名説を百パーセント否定しきることとはできない。したがって次節では、天野・倉田の主張を同時代資料に基づき検証したい。

### 三、家畜人ヤプー騒動と共同筆名説

共同筆名説は、そもそも、一九八二年の森下の暴露を受けて、天野哲夫が主張し始めた説であり、後に倉田もこれを踏襲した。これ以前、沼正三が複数人の筆名であるとか、天野であるとする見解は、『奇譚クラブ』、『風俗奇譚』、『SMキング』等のマニア雑誌では管見

の限り一切なく、例外なく天野と沼は別人であると認識されている<sup>13)</sup>。以下、この森下の暴露記事に端を発する騒動を概観した上で、共同筆名説が成り立ちえないことを明らかにしたい。

一九八二年一月、雑誌『諸君!』に森下小太郎による「『家畜人ヤプー』の覆面作家は東京高裁・倉田卓次判事」という暴露記事が掲載された。翌一二月号には「倉田卓次判事への公開質問状」が、翌年二月号には「沼正三からの手紙」が掲載された。これらに対する天野・倉田の反論は各一度のみである。以下、まず森下の暴露記事の内容を確認したうえで、両者の主張を検討したい。

一九八二年一月号掲載の森下の記事は、森下と沼の出会いやその後の交流を語り、沼正三は天野哲夫ではなく倉田卓次であると主張する内容である。話題は様々に及ぶため、沼と倉田の証明に関して重要な主張・証拠のみを記すと以下のようになる。すなわち、①森下が『奇譚クラブ』編集部を介して「沼正三」と名乗る人物と、十年以上文通していたこと、②その文通相手の住所は「長野県飯田市江戸浜町県営住宅七号」で、「原政信方倉田貞二」宛であったこと、③その文通相手からの手紙の写真、④その手紙の内容が、連載中の「ヤプー」の構想に関するものであり、沼正三以外に書けない内容を含んでいるということ、という四点である。これらはすべて、倉田が後に事実として認めている（倉田二〇〇五）。

長野地家裁判事補として飯田支部に転出したが、（中略）「奇譚クラブ」を購読する（時間的・金銭的）余裕も十分あった。法吏H君に頼んで「H方倉田貞二」名で購読した（中略）編集部は読者同士の文通も仲介してくれたので、M関係ではA、M及びF関係ではB<sup>14)</sup>という文通相手を持つようになった。（倉田二〇〇五、四

頁）

森下が暴露した①④の諸点は、すべて事実であったということである。これに加えて、森下は二〇年以上前に一度沼本人に会っており、その人物は、裁判を傍聴して見た倉田卓次その人であったという主張もしている。森下が沼と会ったのは二〇年以上前に一度のみであることを踏まえると、根拠としては薄弱である。ただし、①④が事実であるならば、そもそも森下と面会した人物が倉田本人かどうかは大した問題ではないため、検討する必要はないだろう<sup>15)</sup>。同様に、沼が訪問時、アルフレッド・キント&エドワード・フックス著『女天下』を一晩で読了したという有名なエピソードの真偽も検する必要はない。

倉田が認めている以上、争点とはなりえないが、万全を期すため、いくつか裏付けとなる事実を示しておく。沼正三と森下の文通のきっかけについては、『KK通信』一五号（一九五三年二月号）掲載の天泥盛栄<sup>でもりえ</sup>の投稿から裏付けられる。天泥盛栄とは森下が用いた筆名の一つであり、『KK通信』とは、『奇譚クラブ』が直接購読者に一時期頒布していた小冊子である。ここで天泥は確かに編集部回送によって沼からの手紙を受け取ったことを述べ、文通の求めに応じている。以降遠くない時期に、沼と森下の文通は開始されたと判断して差し支えないだろう。森下の暴露記事では、この時の文通先住所が長野県であったかのような書き方をしているが、この時まだ倉田は東京在住である。しかし繰り返すが、倉田自身が文通の事実を認めていること、倉田が後年実際に長野県に転居する以上、森下の記憶違いとして処理してかまわないはずである。

このように、森下の暴露記事には多くの記憶違いが含まれ、森下が

当時の『奇譚クラブ』を読み返さずに本記事を書いたことは明白である。しかし、このような不正確さは、森下が沼正三を名乗る人物と文通しており、その人物が倉田である、という事実の真实性を損なうことはない。

さて、天野哲夫は、『潮』一九八三年一月号において森下に反論し、それまで取ってきた代理人の立場を捨て、自分こそが沼正三であると主張した(天野(沼) 一九八三)。そして、文通相手であった倉田には、「ヤプー」および「手帖」を成すにあたり様々な助言をもらっていたこと、沼正三は複数の人格を統合したものであり、その意味では沼正三は一人天野だけとはいいがたかったため、今まで代理人の立場をとってきたと述べた。天野のいう、天野が沼を名乗るようになった経緯を引用すれば以下のようになる。

吉田稔氏は特別に私に秘密の仕事を託された。匿名投稿の幾つかを取りまとめたものを選別し、連鎖エッセーの形式で誌上に発表することである。(中略) 私は私なりに、それまで四つ五つのペンネームを使い分け、幾誌かに各様の寄稿をしていた。(中略) それらとは全く独自に、沼正三という名前をつくり(中略)、投稿原稿の手入れと編集、加筆潤色に自身の分をも組み込みつつ、その連鎖エッセー(これが『ある夢想家の手帖から』の筆者としての統一的人格を作り上げるよう努力した。(中略) 私のペンネームが四つ五つありながら、当人は実は一人というのと、ただ一つの沼正三のネームに、実は四つ五つの、あるいはそれ以上の人格が蔵されていた、というのと、皮肉な対照である。(二五二頁)

吉田稔とは、『奇譚クラブ』の編集者であり発行人である。天野は、

吉田に頼まれ、それまで用いていたペンネームとは別に、沼正三という名前を作り、『ある夢想家の手帖から』の連載を開始したという。そして、「沼正三」は複数の匿名投稿の上に成り立ったいわば架空の人物であるとし、それに森下はまふとだまされたのだ、と主張した。その上で、「K(倉田)氏のアイデアを借りたが、K氏が原稿そのものを書いたことは一度としてない」と倉田の直接的関与を一切否定した。森下の記事でもっとも強力であるのは、倉田が沼を名乗り森下と文通していた事実であるはずだが、天野はこのことには全く触れていない。文通自体は事実であったため触れることができなかつたのだろう。

倉田は、天野・森下と文通していた事実を二〇〇五年のエッセイで認めたくえで、天野から「ヤプー」の構想を聞かされ相談を受け、SF小説からのアイデアを提供し、「国文学界に例のない「未来幻想マゾ小説」を作れ、と煽った」という(倉田 二〇〇五、四頁)。

天野と倉田の主張は『奇譚クラブ』や『あまとりあ』等の同時代資料から確認できる経緯と全く異なる。そして彼らには倉田が沼であることを隠蔽したいという感情があり、したがって虚偽の主張をする動機もある。そのためこれらを事実と認めることはできない。天野が沼と全く異なるプロフィールを持つことはすでに指摘したが、これらの言い分についても一応検証を加え、天野が『奇譚クラブ』時代の沼ではありえないこと、「手帖」が匿名投稿の集成だとする説もあり得ないことを論証しておく。

#### 四、共同筆名説の矛盾

第一に、天野は「沼正三」という筆名は、「四つ五つの、あるいは

それ以上の人格が蔵され」ていることから、沼正三を共同筆名であるかのように語っている。しかしすでに明らかにしたように、沼は完全に倉田に一致する人物であり、複数人物の要素が入る余地はない。仮に天野の言ったことが事実であり、この沼の造形が天野の手によるものであったとしても、正体を隠したい倉田が、自身とうりふたつのマゾヒスト・沼を造形することを認めたとはいえ難い。何よりも、もし仮に天野が倉田をモデルに沼正三を生み出したのであれば、森下への反論でそう述べればよかつたはずである。

次に、天野は沼正三というマゾヒストを作り出す以前に、あたかも『奇譚クラブ』に寄稿していたかのように書いているが、天野が『奇譚クラブ』に寄稿し始めるのは一九五七年一〇月号からであり、沼正三の初登場（一九五三年四月号）から四年半も後である。この前後関係は、あくまで現在天野の筆名として知られているものの初出に過ぎず（KS、黒田史朗、阿麻哲郎、安東泉、水尾究<sup>16</sup>）、その他に、現在誰にも知られていない筆名があり、それをを用いて『奇譚クラブ』に投稿していた可能性は、限りなく低いがゼロではない。しかし天野はこれまで、一度もそのような筆名があるとは表明していないし、その筆名を具体的に示すこともしていない（示せば森下の告発に対する強い反証となつたはずである）。天野は沼が『奇譚クラブ』に初めて現れてからしばらくは、『奇譚クラブ』と対立関係にあつた雑誌『あまとりあ』<sup>17</sup>に寄稿していた。

次に、沼・森下・天野は、いずれも『奇譚クラブ』編集部の仲介による文通により知り合った、と述べている。先に述べたように、森下と沼の文通は、一九五三年一二月以降、そう遠くない時期に開始されたと推測できる。この沼は既述の通り倉田であることが確定している。そして重要なことは、この時の沼からの文通申し込みは、編集部

による回送を用いていたことである。『奇譚クラブ』では一時期、住所を編集部のみ知らせ、希望相手に編集部から手紙を転送してもらう形の文通仲介が行われていた。つまり編集部は、倉田の手紙を沼正三からの手紙だと認識して、森下に転送したということである。この時期に活動していた沼が天野であるなら、天野の筆致と異なる倉田からの手紙を、沼正三の手紙として森下に転送することはありえないであろう<sup>18</sup>。倉田が天野の筆致を真似することも不可能である。倉田が、自身が主張するように『奇譚クラブ』の一読者に過ぎないのであれば、天野の直筆を見る機会はないからである。沼が森下と文通を開始した時期はかなり早く、沼が『奇譚クラブ』に登場してわずか数カ月後のことであるから、これより早く、天野と倉田がどのようにしてか知り合い、森下を二人がかりでだますほど結託できたとは考えられない。そもそも、なぜ森下をだます必要があつたのか、その動機が不明である<sup>19</sup>。

加えて、天野が沼だつた場合、天野はどうやって倉田と文通を始めたのだろうか。沼が初期には自身の住所を秘匿していたことは、（森下一九八二a、二二三―二三四頁）等複数の証言があり、さらに当時の誌面もそれを裏付けている。すなわち、一九五三年五月号に「手帖」の連載予告が掲載されるが（二八頁）、翌六月号には、「編集部より沼正三氏へ、（中略）予告通り誌面を取りますから何卒引続いて御送稿の程願ひ申し上げます」（二七七頁）という沼へのメッセージが掲載される。このような誌面を使った個人への呼びかけは、投稿者が自身の住所を記載していなかった際にとられる方法である。既述の通り、当時、サディストやマゾヒストは異常者、潜在犯罪者として白眼視されていたため、住所と本名を記さず原稿を送付する投稿者は少なくなかつた（河原二〇二二）。したがって、編集部が住所不明の投稿者に

連絡を取りたい場合、誌面を用いて本人に呼びかけ連絡を促すという方法がとられることがよくあった。<sup>20</sup> 沼の場合も、沼と双方方向のやり取りができていれば呼びかけを掲載する必要はない。したがって「手帖」連載開始時、編集部はまだ沼の住所を知らず、一方的に送られてくる原稿を掲載する段階にあったと考えられるのである。

住所を開示していない沼正三に編集部から文通希望の手紙を転送することはできないため、文通は必然的に、沼の方から相手に申し込むこととなる。沼が自ら手紙を出し文通を申し込む相手となれば、その相手は必ず複数回『奇譚クラブ』に、沼の気を引く投稿をしていなければならぬはずである。倉田は、沼でないとするなら一読者ではありえず、沼以外の投稿作家でなければいけないのである。それも、森下に倉田からの手紙が届く一九五三年一二月以前にである。しかしこれ以前に、倉田に該当しそうな正体不明の作家はいないし、倉田もそのような事実があったとは主張はしていない。

さらに、「手帖」連載開始時、編集部が沼の連作先を知らなかったことは、編集部から「手帖」の連載を依頼されたという天野の主張も事実ではないことを意味する。編集部から匿名投稿が送られてくる事態もあり得ない。このように、天野の主張は、同時代資料から整合的に解釈することは不可能であり、事実と認めることはできない。

一九八二年、『奇譚クラブ』はすでに廃刊しており、沼が活動した時期の『奇譚クラブ』のバックナンバーを通覧することはかなり難しかった。そのため、事実を確認されることはおそらくないと考え、天野は架空のストーリーを構築したのではないか。倉田はそれを後に踏襲したと考えられるが、文通の事実については、飯田での仲介者である原政信の名も公開されているため、事実と認めざるを得ず、その上でさらなる弁明を付加したのであろう。

## 五、マニア雑誌と複数筆名

天野が共同筆名説を思いついた背景には、『奇譚クラブ』をはじめ、初期のマニア雑誌の投稿作家が多数の筆名を用いていたという事実があると考えられる（飯田 二〇一三、河原二〇二二）。このことは事実で、『奇譚クラブ』関係の作家でいえば、編集・挿画・記事執筆すべてを行なった須磨利之（喜多玲子、美濃村晃、円城寺達など）、『奇譚クラブ』の投稿作家であり、後に雑誌『裏窓』の編集長となる飯田豊一（藤見郁、飯田豊吉、南村蘭など）<sup>21</sup>をはじめ、森下小太郎もまた、谷貫太、原忠正、森本愛造、森下高茂、天泥盛英などの筆名を用い、毎月複数の記事を寄稿していた。<sup>22</sup>

しかし、ここで示されるのは、ひとりの作家が多くの筆名を持っていたという事実であり、ひとつの筆名を複数人で用いていたという天野の主張とは似て非なる事態である。なぜ、このように当時の作家が複数の筆名を用いていたかといえば、それは編集部側からの要請であり、誌面を多様に見せるためであると解するのが妥当である。一般大衆誌ですら筆名の複数利用はなされていたし、マニア自身の立場から、読み応えのある文を書ける作家はまだまだ少なかった。『KK通信』一五号では、天泥盛英（森下）が当時用いていたペンネームの由来を語り、「天泥盛英」は自身でつけた筆名だが、「森本愛造」は編集部が付けたものと述べている（六頁）。天野哲夫もまた複数の筆名を持ったが、その多くが『裏窓』編集者であった飯田豊一が考えたものだという（飯田、二〇一三、一七〇頁、河原二〇二二）。この点からも、複数筆名が編集部側からの要請であることが推測される。

重要なことは、このような複数の筆名利用は、建前上は秘密であるものの、多くの読者にはなんとなく了解されていたことだということ

である。例えば沼は、誌上で交流していたマゾヒスト、麻生保にむけて、「森本氏・原氏・天泥氏・森下氏を別々の人のように思っておられるようですが、同一人です。文章から見抜けませんでしたか」と述べている（沼 一九六〇a、一二四頁）。また、『奇譚クラブ』の後発類似誌である『裏窓』の一九六一年一月月号掲載の編集長交代告知では、新たに就任する飯田豊一がそれまで使用していた筆名が複数記載されている。しかしこの暴露に対する読者の反応は、「矢桐重八先生と飯田豊吉先生が同一人だったということは、私はうすうす気づいていたので、そんなにおどろかなかった」（有田 一九六二、一六一頁）といったものであった。つまり、複数筆名はそれほど真剣に隠す必要がなかったのである。その他、天野は『裏窓』でも活躍するが、こちらで用いられた阿麻哲郎（あま・てつろう）は、天野哲夫であることが一目瞭然である。

加えて、天野が匿名原稿の集積だとした「手帖」は、告白記の集積ではなく文献紹介を主とし、なかには未邦訳文献の訳出も多く含まれていた。かかる語学力を有し、『奇譚クラブ』へわざわざ訳出稿を送付する熱意のある読者がいたとすれば、その人物の努力を「沼正三」の名に集約するよりも別の投稿作家として育てたほうが、誌面の多様性という観点からも、一人の作家が毎月書ける枚数には上限があるという点からみても、編集部としては良いはずである。このように、天野の主張した沼Ⅱ複数人格説は、荒唐無稽の珍説と言わざるをえないのである。

ひとつの筆名を複数人が用いていた例外事例として、『奇譚クラブ』の編集者名である箕田京二がある。箕田は、最低でも須磨利之と吉田稔の二人が用いた名である。一九五一年代の『奇譚クラブ』では、「京二」、「箕田京太郎」、そして「箕田京二」が須磨の手による挿画の

作者として現れる。その後、奥付で編集人を箕田京二、発行人を吉田稔とする号が現れ、編集人はときに須磨利之とも書かれるため、この段階で箕田京二は、須磨利之の名のひとつであったと考えられる。

須磨は一九五三年春頃『奇譚クラブ』編集部を退社し、東京で別の性風俗雑誌にかかわるようになる。しかし、箕田京二の名は『奇譚クラブ』の奥付に編集人として残り続け、編集部便りなどで用いられ続ける。これは、吉田稔が編集人名として箕田を引き継ぎ用いたと考えてよいだろう。その理由は推測するしかないが、須磨の退社は、須磨の別名である絵師・喜多玲子の退社として誌面で報告されており、喜多とともに箕田の名も誌面から消えるのは望ましくないと判断されたのかもしれない。

以上、マニア雑誌における複数筆名の使用は、例外はあれども基本的に少ない作家数を多く見せるためのものである。沼正三Ⅱ共同筆名説はこの原則から逸脱するものであり、特別な事情なくしては認めがたいといえる。

## 六、「家畜人ヤプー」騒動はなぜ起きたか

森下と倉田は、一〇年以上にわたり文通した仲であった。さらに森下は天野とも親しく、森下は「彼と私は『奇譚クラブ』同人として旧知の間柄である」（森下 一九八二a、一二九頁）と述べている。『奇譚クラブ』誌面上では、沼・天野・森下は、お互いに著作の感想を伝えあったり、情報交換をしたりと、長い間関係は良好かつ濃密であったように見える。なぜ森下は倉田・天野に敵対するような行動をとったのだろうか。また、なぜ私的にやりとりするのではなく、雑誌での暴露に至ったのだろうか。

森下小太郎は『諸君!』の記事で、沼正三の正体を暴露するのは、沼になりすました天野を告発することが本旨ではないと述べている。森下は、「作品を濫りに他人の手で改変させてはならない」とし、倉田には、天野に「沼正三名であちこちに文章を書き散らすことを許さない」、「どこまでがあなたの手になるものか、それを判然とさせる」責務があるとして、「家畜人ヤプー」の続編を倉田自身の手で執筆するよう求めている（森下一九八二b、一四一頁）。森下はさらに、「人を裁くことは、司法試験をパスできる人間なら誰にでもできる。しかし『家畜人ヤプー』の完成は、あなたでしかなし得ないのである」（同、二四二頁）とも述べている。このように森下は、沼正三作品の真贋にこだわりをみせ、真の沼正三に「家畜人ヤプー」の続きを執筆してほしいという気持ちを持っている。代理人である天野の活動によって、真の沼の価値が貶められると考えていること、森下が「家畜人ヤプー」という作品を高く評価しているからこそその暴露であったことがうかがえる。<sup>(23)</sup> 森下は、『ヤプー』刊行時の一九七〇年においても、作者探しが過熱化することで、『奇書・家畜人ヤプー』もまた、人々の記憶から遠ざかってゆくだろう。その作品が多く示唆に富んでいるにもかかわらず、それは忘れられてゆくに違いない」と述べ（森下一九七〇、一一一頁）、沼の正体が焦点化されることで、『ヤプー』が単なるゴシップとなり、作品自体が顧みられなくなることを憂慮している。

森下は、「家畜人ヤプー」の初出タイトルを「畜人ヤプー」だと誤認するなど、果たして本当にそれほど沼のファンだったのか疑わしい面があるのだが、少なくとも本人の意識としては、自身こそが沼正三の真のファンであり、真の「ヤプー」の理解者である、と考えていたと思われる。以上のことから、森下は沼正三を信奉するがゆえに、実

名の暴露という暴挙に出たといえる。沼を信奉しているならば、天野と直接話しあい、落としどころを見つけてという手段も選択肢としてはあったはずである。しかし、それが不可能であった理由も森下のそれまでの活動から推測できる。

森下は過去に、俗に「あけぼの会事件」と呼ばれる事件を引き起こしている。あけぼの会とは、『奇譚クラブ』を通じて森下が一九五四年前後に結成したマゾヒズム関係サークルで、海外映画の上映会、会員同士のプレイ翰旋、撮影会などを行っていたとされる（河原二〇二一）。しかし一九五九年一月、森下が本会で売春翰旋や、撮影写真をネタに恐喝を行っていたとの報道が複数の週刊誌でなされた（編集子一九六〇）。森下もまた週刊誌にて濡れ衣だと反論した。<sup>(24)</sup> この反論には、あけぼの会会員のプライベートに抵触するような内容が含まれていたらしい。沼はこの点に「雑報欄」で触れ、「曙会会員だった人々の性向等をデータをあげて語っているのは、仮名をある程度用いているとしても、会の主催者としての信義に反することなのではないかと、氏のために惜しまれる」と述べている。（沼一九六〇b、一九九頁）森下は、秘密を共有するには不安のある人物として、沼には映っていた可能性が高い。<sup>(25)</sup>

さらに、森下はかねてより、サディズムやマゾヒズム、フェティシズムについて、恥じることはなく、堂々としているべきだと主張していた。<sup>(26)</sup> 森下は、SM（森下の表現で言えばSMF）を広く社会に認めさせ、日の当たるところに出したいという思いの強いマゾヒストであった。このような態度は、あくまで正体を隠したい倉田の立場とは大いに異なる。一九六〇年代の『風俗奇譚』に森下が発表したSMF論の語気はかなり荒く、天野や倉田が事情を説明したとしても一蹴し、逆に実名を公表すべきだと説得にかけりそうな勢いがある。

実は『ヤプー』刊行直後の一九七〇年、『風俗奇譚』誌上で天野の代理人としての振る舞いを厳しく批判していた森下に対し、天野は、倉田と森下を引き合わせ、直接森下を説得しようとしていたようである。天野と森下はこの前後『風俗奇譚』上で、『ヤプー』についてやりとりをしているが、そのさなかの森下の文に以下のような記述がある。

四月一八日午後六時に、沼氏を同行してA氏とわたしと三人で一夜飲もうという申し出をA氏がしたからであり、そうして、その席はわたしが準備しようということになったからである。私は、沼氏と会わねばならない必要はないし、こんな問題の最中に会うことは望ましくないと思ったのだが、しかし、お互いに旧知であるし、A氏が、沼氏とわたしが会えば、わたしの抱いた疑念は解決するといふので、それに越したことはないとおもったのである」  
 (谷 一九七〇、一三九—一四〇頁)。

谷貫太は既述の通り森下の筆名であり、A氏とは天野のことである。天野は『風俗奇譚』に寄稿もしており、当然森下は天野がこの文を読むことを前提として書いている。よって全くの嘘を書いたはずはないため、沼正三との会合を天野が提案したという事実はあると考えてよい。この会合に結局倉田は現れなかったが、天野が自ら提案している以上、倉田の欠席が天野の本意であったとは考えにくい。天野に依頼されたが、倉田がこれを拒否したため不成立となったと推測されよう。森下のSMに対する主義信条および彼のこれ以前の行いから、倉田は森下に本名を告げることが決断できなかったと考えられる。結果的に見ればその危惧は正しかったといえるかもしれない。

## おわりに

本稿は、『奇譚クラブ』で活躍し「家畜人ヤプー」を執筆した沼正三が倉田卓次であることを明らかにし得たと考える。『奇譚クラブ』誌上の沼正三は、倉田卓次ただ一人と考えられるため、同誌に発表された沼の著作はすべて倉田のみの手によると断定してよいと考えている。その後、一九七〇年の単行本刊行までは、天野が沼の代理人となったり、沼本人のようにふるまったりといった宣伝戦略があったとはいえ、両者が別人であることは『奇譚クラブ』関係者には自明であったため、天野が沼として執筆活動まで行ったとは考えにくい。とはいえ、後年天野は、沼正三名義でいくつかの著書を出版している。『奇譚クラブ』以外の媒体に発表された沼正三名義の著作が倉田の手によるものなのか、天野による加筆があるのか、天野のみが執筆したものなのかは今後個別に検討されなければならない。

最後に、論じ残した重要な点に触れたい。『家畜人ヤプー』とその著者をめぐる騒動は、常に沼正三という人物を焦点化してきた。翻つて、代理人として、そしてときに沼正三本人としてあらわれる天野哲夫は、現在『家畜人ヤプー』との関係を抜きに語られることができない作家となってしまう。しかし、天野が自身の名義で発表した著作にみえるマゾヒズムは、倉田が沼として示したマゾヒズムとはさまざまに異なっている。例えば、沼正三が白人崇拜と家畜化、汚物愛好の空想を主として書き残したのに対し、天野に白人崇拜の書き物はほとんどなく、彼は日本人女性を相手とする実際の体験からマゾヒズムを論ずる作家であった(鈴木 二〇一〇)。加えて、彼は「精神薄弱児」を装って、女性の生活に入り込むという実践を、驚くべきことに何度も実際に行っていた<sup>26)</sup>。そして、当初は天野に対して礼儀をもって

接していた女性たちが、完全に彼を「莫迦」と確信するやいなや豹変し、例外なく彼を見下し人間扱いしなくなるその瞬間を愛した。このような天野の欲望は、「礼儀をもつて接する」というプロセスを制度化により省略し、家畜化の完了した世界を構想した沼の欲望とは似て非なるものである。

従来、天野と沼のマゾヒズムの相違は十分に意識されることがなかった。加えて、天野のエッセイには政治的発言も多く、『ヤプー』における天皇制の位置づけ等とそれらを関連させて言及されることがあるが、これは明らかに誤りである。このように、沼正三を謎めいた匿名作家として扱い続けることは、『ヤプー』の作品解釈に不利益であることはもちろん、(鈴木二〇一〇)も指摘するように、天野という作家が常に『ヤプー』の影に押し込められ、正当に評価される機会を奪うことでもある。本稿が、沼正三と天野哲夫を適切に区別し、別個に論ずるための第一歩となれば幸いである。

【付記1】本研究は、科研費・21K17987およびサントリ文化財団若手研究助成「学問の未来を拓く」の助成を受けている。記して謝意を表したい。

【付記2】本郷先生のゼミはとてこわいゼミでした。ずっと『類聚三代格』を読んでいましたが、助詞の「を」を「に」と間違えただけで二〇分間無言、修士課程一年目は議論に全くついていけず、半年間一言も発言することができませんでした。しかし、先生のゼミで類三を読んだことは、いつまでも忘れがたい、本当に楽しい、きらきらした思い出です。その後私は古代史とは全く違う分野で論文を書くようになりましたが、今でも先生に教わったように資料を読んでいます。

古代史からずいぶん離れてしまったため、私はもはや、このコミュニ

ニティからは逸脱してしまったものとあきらめていました。しかし本郷先生は、私が現職に就いた際に大変喜んでくださり、お祝いの会を催してくださいました。このご恩も忘れがたいことです。ありがとうございました。

### 《参考文献》

- ・天野哲夫(沼正三) (一九八三)「家畜人ヤプー賊物譚」『潮』二八五
- ・天野哲夫(一九五七)「マゾヒズムへのいざない」『奇譚クラブ』一〇月号 (一九八八)「ある異常者の体当たり随想録」『S&Mスナイパー』七月号
- ・ (一九八九)「ある異常者の体当たり随想録」『S&Mスナイパー』三月号
- ・ 有田和彦(一九六二)「無題(読者短評)」『裏窓』一月号
- ・ 飯田豊一(二〇一三)『奇譚クラブ』から『裏窓』へ、論創社
- ・ 河原梓水(二〇一九)「マゾヒズムと戦後のナショナリズム」坪井秀人編『戦後日本文化再考』、三人社
- ・ (二〇二二)「飯田豊一(濡木痴夢男)氏の軌跡とその仕事」『立命館文学』六七四
- ・ (二〇二二)「セクシュアリティの生活記録運動——戦後日本における「変態性欲」と近代的女性生活」『Antiled』
- ・ (二〇二二)「沼正三」日本近代文学館編・講談社刊行『増補改訂デジタル版 日本近代文学大事典』(二〇二三年二月リリース版)、<https://japanknowledge.com/contents/jkindaibungaku/> (最終閲覧日:二〇二二年二月一六日)
- ・ 倉田卓次(一九八七)『裁判官の戦後史』、勁草書房
- ・ (一九九三)『続・裁判官の戦後史』、悠々社
- ・ (二〇〇五)「老法曹の思い出ばなし(6)——「家畜人ヤプー」『判例タイムズ』一一八〇
- ・ 黒田史朗(一九五八)「マゾヒズムへのいざない 第二三回」『奇譚クラブ』同年一〇月号
- ・ KS(一九五四)「暗い欲望」『あまとりあ』同年一〇月号
- ・ 鈴木真吾(二〇一〇)「沼正三と天野哲夫——ある覆面作家の素顔をめぐって」『和光大学 現代人間学部紀要』三

- ・谷貫太（一九七〇）「SMFのために」『風俗奇譚』七月号
- ・沼正三（一九五三a）「神の酒を手に入れる方法」『奇譚クラブ』四月号
- ・（一九五三b）「マゾヒストの会」『奇譚クラブ』五月号
- ・（一九五三c）「あるマゾヒストの手帖から 第八」『奇譚クラブ』六月号
- ・（一九五三d）「あるマゾヒストの手帖から 第十八」『奇譚クラブ』八月号
- ・（一九五四a）「スカタロジという語について 高橋鉄氏に問う」『奇譚クラブ』四月号
- ・（一九五四b）「重ねて高橋鐵氏に」『奇譚クラブ』六月号
- ・（一九五四c）「あるマゾヒストの手帖から 第五十九」『奇譚クラブ』七月号
- ・（一九五四d）「あるマゾヒストの手帖から 第六十三」『奇譚クラブ』九月号
- ・（一九五七）「ある夢想家の手帖から 第六六」『奇譚クラブ』四月号
- ・（一九五八）「ある夢想家の手帖から 番外 麻生保氏に答う」『奇譚クラブ』三月号
- ・（一九六〇a）「沼正三だより」『奇譚クラブ』一月号
- ・（一九六〇b）「雑報欄 三三三三 原忠正「わが性欲に鞭あるのみ」（実話雑誌四月号）」『奇譚クラブ』七月号
- ・（一九七六）「ある夢想家の手帖から6 黒女皇」潮出版社
- ・編集子（一九六〇）「私の編集ノート」より『奇譚クラブ』四月号
- ・森下小太郎（一九八二a）「家畜人ヤプー」の覆面作家は東京高裁・倉田卓次判事「諸君！」一四（一一）
- ・（一九八二b）「倉田卓次判事への公開質問状」『諸君！』一四（一一）
- （二）
  - ・（一九八三）「沼正三からの手紙」『諸君！』一五（一一）
  - ・森下高茂（一九七〇）「五色めがね」『風俗奇譚』七月号
  - ・箕田京二（一九五四）「世にも不思議なヨタ記事——高橋鐵氏へ訊す」『奇譚クラブ』六月号、一八三頁
  - ・（一九六二）「編集後記」『奇譚クラブ』八・九合併号（本記事は無記名だが、箕田と特定可能なため箕田とした）

## 注

- (1) 一九七〇年出版の都市出版社版初版以降、一九七二年に同社より改訂増補版、一九八四年に角川出版社より限定愛蔵版、一九九一年にミリオン出版より『完結篇』、一九九二年に太田出版社、一九九九年に幻冬舎から刊行されるなど多数。翻訳は仏語版、中国語版がある。コミカライズとしては、石ノ森章太郎著『劇画家畜人ヤプー』、江川達也著『家畜人ヤプー』、三条友美著『家畜人ヤプー REBOOT』などがある。
- (2) 休載時の沼からのメッセージタイトルは「中絶お詫びのご挨拶」（『奇譚クラブ』一九五九年九月号、一一六頁）となっているが、同号編集後記によれば、校了後、沼から文中の「中絶」をすべて「休載」に変更してほしい旨の連絡があったという（同、一七六頁）。
- (3) 休載理由は編集部による検閲である。「奇譚クラブ」は、一九五五年の悪書追放運動の影響を被り書店販売が不可能な状況に追い込まれ、「ヤプー」連載時は通信販売のみの同人誌のような発行形態になっていた。通信販売とはいえ自由に発行できるわけではなく、廃刊を避けるため、編集部が自己検閲による厳しい修正・削除が行なわれていた。沼は、この厳しい修正要求と削除によって執筆意欲が削がれたと「中絶お詫びのご挨拶」で述べている。
- (4) 『奇譚クラブ』一九七〇年七月号「編集部だより」には、沼正三からの手紙が編集部が届いたこと、この度の騒動に関しての詳細が記されていたことが述べられている。そして、「最近週刊誌なんかに出ている想像の記事とは違うのだが、一応PR作戦の成功とみて御同慶至極とお祝いしておこう」（二四二頁）とあり、手紙の内容が、騒動をPR作戦とし、容認する態度であったことをうかがわせる。
- (5) 本稿では「家畜人ヤプー」を略称する際には、単行本化されたものについては「ヤプー」、『奇譚クラブ』連載版については「ヤプー」と表記することとする。
- (6) 『マゾヒストMの遺言』（筑摩書房、二〇〇三）、『禁じられた青春 上・中・下』（幻冬舎アウトロー文庫版、二〇〇八）、『懺悔録 我は如何にしてマゾヒストとなりし乎』（ポット出版、二〇〇九）。ただし、『懺悔録』は天野の死後出版されたもの。これらの著者プロフィールには、倉田が『奇譚クラブ』に発表したものではなく、天野自身の経歴が記載されており、著者が倉田ではなく天野であることは、みるひとが見ればわかるようになっていともいえる。
- (7) この都市は、「赤道近い南洋の都市」とされる（同、七一頁）。

- (8) 本号は一九五三年五月一日発行である。
- (9) 本記事は、潮出版版『ある夢想家の手帖から』へ収録されているが、その際に「公務員アパート」は「アパート」に修正されている。
- (10) 本号は九月一日発行である。
- (11) 長与又郎の五男、弘のこと。弘は大正一二年二月二十八日生、一九四六年に死去。
- (12) 一九六二年一月～八月には、『裏窓』に阿麻哲郎名義で「畜獣デリムソン」・「ゴルドンの記憶」を、黒田史朗名義で「結婚生活における マゾヒズムへの道程」等を連載している。なお、一九六一年も全期間にわたって『裏窓』に原稿が掲載されている。
- (13) 一九七〇年二月に『ヤプー』が刊行されると、『奇譚クラブ』には『ヤプー』への言及が相次いだ(やまかずひこ「沼正三『家畜人ヤプー』単行本刊行さる」同年五月号、阿曾比須人「『家畜人ヤプー』雑感」、同「M小説と作家たち」、新宿町人「マゾヒストM氏の肖像とKK誌」同年六月号、同「週刊誌に在るまぼろしの沼正三」同年七月号、同「ヤプー問題に思う」同年八月号、辻村隆「サロン楽我記 第七十一～七十三回」同年五～七月号など)。一九七〇～一九七一年発行号をすべて確認したが、いずれの記事も天野と沼が別人であることを前提としている。いくつか例を挙げれば、八月号掲載の新宿町人「ヤプー問題に思う」では、「代理人氏を沼正三氏そのものにしたくてたまらないようにみうけられるのだが」、「私は、代理人の活躍が、けっしていけないといっているのではなく、(中略)すくなくとも後世に誤解を招くような言動は、現につつしんでほしいと思うのである」と述べられている(一一九頁)。一九七一年一〇月号掲載の辻村隆「サロン落我記 第八十八回」では、『奇譚クラブ』に一九四〇年代からかわり、ほとんど編集部側の人間となっていた辻村隆が、沼正三について困鬼六と交わした会話が引用されている。いわく、「辻村さんは今夜、沼正三が出てくると思いますか？私は絶対、出て来ないと確信してるんですかね」「しかし天野氏は、ゼツタイ引っ張り出してみせると、張り切っていましたよ」「いざとなれば肩透かしですよ(中略)沼正三には、ゼツタイ、公開の席上に出られない理由があるんですよ」。鬼六氏は(中略)確信を持って言い切った。私も沼正三については、浅薄ながらある程度のは知っていたから彼と同意見であった。果たせる哉、その夜の、三人の鼎談の企画は、沼正三欠席で、結局、私と鬼六氏の対談に終わってしまった(二三五頁)。
- (14) Mはマゾヒズム、Fはフェティシズムのこと。Aとは天野、Bとは森下を

- さす(倉田 二〇〇五)。
- (15) なお、森下は一九七〇年にも、沼が家に泊まったと述べているので(谷一九七〇、一三九頁)、一九八二年に創作された逸話とは考えられない。沼が森下の家を訪問したこと自体は事実とみなしてよいと考えている。
- (16) 天野の筆名特定については、(飯田 二〇一三)、(河原 二〇二二)を参照のこと。
- (17) 両誌の対立関係は、例えば(箕田 一九五四)を参照。なお、当時もつとも強く『あまとりあ』の主宰者である高橋鐵を批判していたのは沼正三であった。
- (18) 一九七〇年五月号掲載の「編集部だより」には以下のようにある。「沼正三氏から久しぶりに手紙をもらいました。(中略)細かい文字で便せんにびっしり書いた筆致は、以前に本誌へ(家畜人ヤプー)や『マゾヒストの手帖』の原稿を書かれた時のものと同一のものでした。又何回となく文通したときの筆致とも一緒ですので、沼正三本人に間違いありません。(二三八頁)。沼の筆致は編集部とのやりとりでは一貫していたこと、さらに筆致から個人識別が可能とされていることがわかる。毎月原稿を目にしている編集部が、別人の文通申し込みを沼だと誤認する可能性は低い。
- (19) 『奇譚クラブ』が文通仲介を行っていたのは、社会に点在し、孤独であったマニアの、語り合う仲間が欲しいという要望に応えたものである。沼正三が、住所の開示すらためらわれる状況で森下と文通を希望したのは明らかに、マゾヒズムを語り合える仲間が欲しかったからだとみなせる。沼はしばしば誌上で他のマゾヒストに呼びかけ、彼らとの交流を楽しんでいたからである。このような状況で、わざわざ自ら文通を申し込んだ仲間をなぜだます必要があるのか、整合的に理解することは困難である。
- (20) 例えば一九五三年一月号には、匿名投稿者の原稿末尾に、「続編是非お送りください。お差支えなければお処を知らせてください御幸福を祈ります。箕田京二」とある(一三七頁)。
- (21) 飯田の筆名については(河原 二〇二二)でより詳細に提示している。
- (22) 森下のこれらの筆名は、(飯田 二〇一三)等多数の本で言及されているほか、『KK通信』一五号など、かなり初期の段階から本人が明らかにし、折に触れ言及しているため、公然の事実といつてよい。
- (23) これに加えて、『ヤプー騒動』には印税問題が大きな影を落とっていた。倉田が二〇〇五年の釈明で印税に長く言及していることからわかるように、森下やその他の沼正三ファンは、天野が印税を不当に横取りしているのではないかとあからさまに疑っていた。同時代資料には、印税の行方につい

てしばしば言及がある。

(24) この件がきっかけとなり、森下は長らく原忠正名で『奇譚クラブ』に連載していた「現代マゾヒズム芸術時評」を一九六〇年四月号で打ち切り、活動場所を他誌に移すことになる。

(25) このほか、(倉田二〇〇五)では、森下があけぼの事件に際して取り締まり側に対する悪感情を募らせたこと、「書いてくる文言が裁判所と裁判官に対する悪意に満ちているので、当方の正体を知ったらどうなるか心配になり」文通を絶つに至ったと述べられている(五頁)。

(26) 例えば、一九七〇年の『風俗奇譚』に森下が毎月寄稿した「今月のことば」を参照のこと。

(27) 『奇譚クラブ』等に掲載された話は基本的に空想と考えるべきだが、天野は例外である。天野の実践にはいくつもの証言があり、事実とみなしうる。詳細は別稿に譲りたい。

(福岡女子大学講師)

